

当科における頸部リンパ節結核の臨床統計

立松 正規 鷗飼 幸太郎 坂倉 康夫

三重大学医学部耳鼻咽喉科

高橋 志光

国立津病院耳鼻咽喉科

A CLINICAL STUDY OF TUBERCULOUS CERVICAL LYMPHADENITIS FROM 1985 TO 1993

Masanori Tatematsu, Kotaro Ukai and Yasuo Sakakura

Mie University

Yoshimitsu Takahashi

Tsu Hospital

22 patients with tuberculous cervical lymphadenitis were treated in the Department of Otorhinolaryngology, Mie University Hospital from 1985 to 1993. Most of them had painless masses in the neck. Tuberculin skin tests were all positive. Characteristic findings were found on CT

scan in 12 patients.

Surgical resections performed in all 22 cases showed pathohistological evidence of tuberculosis. Anti-tuberculosis chemotherapy was administered in all cases. We have not ever experienced recurrent cases.

はじめに

結核は戦後、抗結核剤の進歩・予防接種の普及・国民の生活環境の向上により急激に減少してきたが、年間約5万人もの患者が新たに登録されており¹⁾、肺外結核の中では頸部リンパ節結核の頻度が最も多い²⁾³⁾。

このように耳鼻咽喉科領域において結核と接する機会は少なくはなく、他の疾患特に悪性腫瘍との鑑別に苦慮することが多い。

今回我々は1985年1月から1993年12月までの9年間に当科において頸部リンパ節結核と診断された22例について統計的検討を行ない若干の考察を加え報告する。

結 果

1. 年次別症例数・性別および年齢

年次別症例数では年平均2.4人に認め、1985年2例、1986年2例、1987年2例、1988年1例、1989年2例、1990年4例、1991年3例、1992年1例で1993年には5例が認められた。性別は男性7例、女性15例で男女比は1:2.1と女性に多く、平均年齢は43.9歳、最年少者は1歳6カ月、最高齢者は85歳と各年代層に認められた (Table 1)。

2. 来院までの期間

22例中14例が1カ月以内に来院し、1年以上経過して来院してきた患者は2例でとの内

	~9	~19	~29	~39	~49	~59	~69	~79	80~	計
男	0	0	0	1	4	0	1	0	1	7
女	2	2	2	1	0	5	0	3	0	15
計	2	2	2	2	4	5	1	3	1	22

Table 1 Sex and age distribution

1例は腫瘍が出現後10年間放置していた。

2. 主 訴

無痛性腫瘍が18例と多く、有痛性腫瘍は4例であった (Fig. 1)。

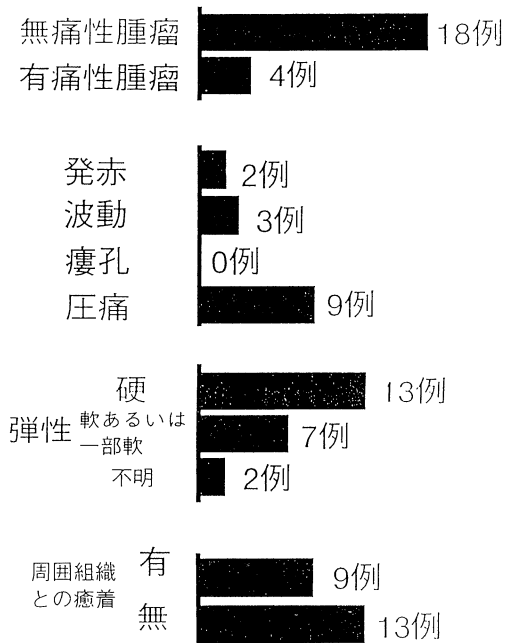


Fig. 1 Findings on first examination

4. 初診時所見

リンパ節腫瘍は右側6例、左側10例で6例が両側性であった。単発11例、多発11例大きさは直径5mm~60mmまで種々であり、直径60mmを越えるものが3例あった。部位別では頤下部2個・顎下部16個・耳下部4個・側頸部9個・鎖骨上窩6個・気管前1個であった。また、頸部を高さにより上・中・下に分類するとそれぞれ14例・4例・4例と上頸部に多く認められた (Fig. 2)。

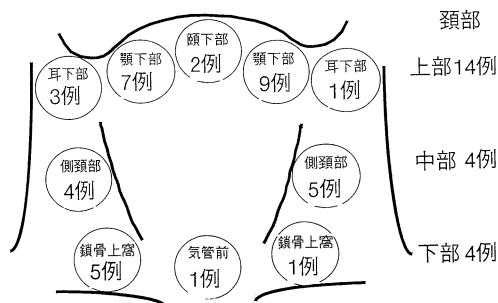


Fig. 2 Distribution of location which masses occupied

圧痛を伴ったものは9例、局所の発赤を有したものの2例で、硬さでは弾性硬が13例、弾性軟あるいは一部軟のものが7例あった。周囲組織との癒着については癒着のあるもの9例、癒着のないものが13例であった (Fig. 1)。

5. 検査成績

ツベルクリン反応；21例にツベルクリン反応が施行され全例が陽性であった。この内10例に硬結 (中等度陽性)、1例に二重発赤・2例に水泡形成 (強陽性) を認めた。

赤血球沈降速度；亢進が22例中17例に認められた。

CRP；15例中4例が (+) であった。

胸部単純X線写真；肺結核病変は5例に認められ、いずれも陳旧性の病変であった。

喀痰培養；16例に喀痰培養を行なったが結核菌を証明し得たものは1例のみであった。

PCR；1例にポリメラーゼ連鎖反応法 (PCR法) を施行しており結核菌陽性であった。

CT検査；12例にCTを施行し plain CTでは腫瘍全体が低吸収域を示し、enhanced CTでは辺縁に不整な造影効果のみられる多房性結節を認めるものが6例あった (Fig. 3)。

6. 治療

治療は、22例全例に外科的処置が行なわれたあと、全例に術後INH・RFPを中心と

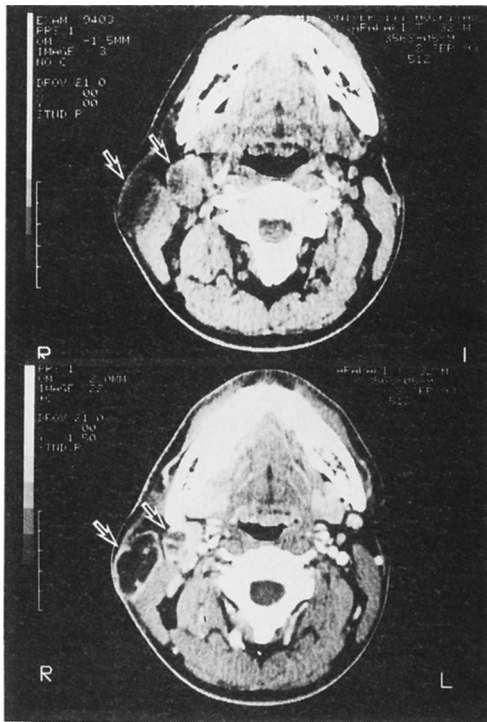


Fig. 3 CT (upper) plain, (lower) enhance
した抗結核療法が6カ月から9カ月間施行された (Table 2) . 現在のところ全症例に再燃は認められていない.

治療	使用された抗結核剤	例数
全摘出+術後化学療法	INH + RFP + EB	1例
	INH + RFP	7例
	INH	1例
一部摘出+術後化学療法	INH + RFP + EB	3例
	INH + RFP	7例
	INH	1例
切開排膿+術後化学療法	INH + RFP	2例

Table 2 Therapy

7. 病巣リンパ節の結核菌および組織所見

塗抹は16例中3例, 培養は16例中1例のみ陽性であった. 組織学的検索では15例に乾酪壊死, 13例にランゲハンス巨細胞を認め, 病理組織検査により全例が確診された.

考 察

頸部リンパ節結核の年次別症例数は近年減少傾向はなく1993年には5例を認めている. 平均年齢は43.9歳, 男女比は2:2.1と女性に多く無痛性腫瘍が22例中18例だった. これらは諸家の報告とほぼ一致していた⁴⁾⁵⁾⁶⁾.

頸部リンパ節結核は悪性腫瘍等他の頸部腫瘍との鑑別に苦慮することが少なくない. 術前診断においてツベルクリン反応は全例陽性であったが戦後の予防接種の普及によりツ反陽性の特異性は高くない. しかし, 強陽性を示すものでは頸部リンパ節結核の可能性は高いと考えられる⁷⁾. CT所見の特徴は低吸収域で辺縁に不規則な造影効果のみられる多房性結節を示す⁸⁾. 喀痰培養・塗抹では陽性率は乏しい. 当科では全症例に対し外科的処置を行ない病理組織学的所見により確定診断を得た. 結核の治療は, 戦後種々の抗結核剤の開発により streptomycin-isonicotinic acid hydrazide-paraaminosalicylic の3剤併用療法が標準とされていたが, 1966年の rifampin の登場により化学療法は飛躍的に進歩した⁹⁾. 当科では頸部リンパ節結核が疑われる症例に対し全例に excisional biopsy を施行し病理組織学的検査・培養を行ない確診を得たのちに内科との相談の上抗結核剤の選択・用量を決定し化学療法を施行している. 現在再燃をみた症例はない.

ま と め

- 1) 1985年1月から1993年12月までの9年間に頸部リンパ節結核を22例経験した.
- 2) 男性7例・女性15例と女性に多くみられた.
- 3) 腫瘍は無痛性が多く, 上頸部に集中していた.
- 4) 全例に外科的処置が施行され病理組織学的所見により確診を得た.
- 5) 術後抗結核療法を施行しており, 再燃をみた症例はない.

参 考 文 献

- 1) 厚生統計協会編：国民衛生の動向 45：160～164, 1994.
- 2) 近藤有好：結核の各病型 -リンパ節結核-, 臨床と微生物 16：461～466, 1989.
- 3) Cantrell RW：Diagnosis and management of tuberculous cervical adenitis, Arch Otolaryngol 101：53～57, 1975.
- 4) 中山明仁：頸部リンパ節結核の臨床統計的検討, 耳鼻臨床 82：871～878, 1989.
- 5) 竹生田勝次：頭頸部の結核, JOHNS 9：947～952, 1993.
- 6) 平出文久：最近の耳鼻咽喉科領域の結核症, 耳喉 49：973～984, 1977.
- 7) 森 泰雄：頸部リンパ節結核の臨床的問題点, 日耳鼻 95：317～323, 1992.
- 8) 大石公子：当教室12年間の頸部リンパ節結核の臨床統計的観察, 耳鼻臨床 79：609～616, 1986.
- 9) 青柳昭雄：結核症の治療の進歩, 化学療法領域 5：640～648, 1989.

質 疑 応 答

質問 鈴木賢二 (名市大)

針生検の有用性につき御教示下さい。

応答 立松正規 (三重大)

FNAでは確診の得られた症例はなかった。

質問 石川雅洋 (近畿大学)

初診時に悪性腫瘍を疑った症例は、あれば教えて下さい。

応答 立松正規 (三重大)

初診で顎下腺腫瘍等、悪性腫瘍を疑った症例もあるが、最終的に組織診で確診に至った。

質問 深木克彦 (順天堂伊豆長岡病院)

① 全例手術されているが、結核性リンパ節を強く疑った場合、手術を選択するのか？

応答 立松正規 (三重大)

① 当科では excisional biopsy を全例に施行し、病理組織診により確診し、抗結核療法を行なう。

② SMの使用例がなかったが、理由は何か

② 抗結核剤については内科との相談にて決定しており、SMは現在使用していない。